

「Xジェンダーであること」の自己呈示

—— 親とパートナーへのカミングアウトをめぐる語りから

武内今日子

(東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員 (DC))

本稿は、4名のXジェンダーを自認する者の語りを事例として、親とパートナーに対して、男女に当てはまらない性自認がカミングアウトされる過程を考察した。分析の結果、まず親子関係においてXジェンダーは、性別適合手術をしない点で性別違和の“軽度”な状態として理解されやすい一方、男女の二値的な性別観念が社会的に強固であるために、男女に当てはまらない性自認自体を伝えて配慮を求めることには困難が伴っていた。加えてパートナー関係において、性的指向を優先して性自認を伝えないことが関係性の摩擦につながっており、あらかじめXジェンダーであることを開示して摩擦を避けようとする試みもなされていた。これらの結果は、Xジェンダーを自認する者が、場面に応じてカテゴリーを使い分けながら他者からの自己への意味づけを変えていこうとする実践を明らかにし、男女に当てはまらない性自認の表現が社会的に可視化される必要性を示唆している。

キーワード

トランスジェンダー、Xジェンダー、カミングアウト、性自認、カテゴリー

I. 問題の所在

近年メディアにおいて性的マイノリティが盛んに取り上げられ、多くの性的マイノリティが自らの性的指向や性自認をカミングアウトするようになってきている。カミングアウトされるトランスジェンダー¹の自

己表象にも、「男」、「女」、「トランスジェンダー」、医学的疾患名である「性同一性障害」(GID: Gender Identity Disorder)のみならず、男女に当てはまらない「Xジェンダー²」や「ノンバイナリー」、あるいは社

1 本稿ではトランスジェンダーを、当事者による様々な自己表象のあり方にかかわらず、「出生時に割り当てられたジェンダーから離れてゆく人々や、ジェンダーを定義し包含するために文化的に構築されている境界を越えてゆく人々」(Stryker 2017: 5)を総称する語として用いる。

2 「Xジェンダー」は男女に当てはまらない性自認を指して日本で1990年代後半から用いられているカ

会的カテゴリーに同一化しない自己像など多様な形が存在している（石井 2012; Dale 2013）。

とはいえ、いかに多様化したとしても性のカテゴリーは、常にその指示対象を他者の呼称という点から構築するために人を傷つけうる一方で、指示対象を完全に余すことなく表現することには失敗するとされる（Butler 1997=2004: 167-9）。そこでトランスジェンダーであることのカミングアウトも、他者からの意味づけにひらかれている性のカテゴリーを用いつつ、カテゴリーによっては表せない個別性をも伝えようとする他者との交渉の過程として描かれうる。

とくに親やパートナーへのカミングアウトの実践からは、性自認を他者に伝える際に生じる複雑な交渉の過程を読み取りうる。というのも親やパートナーは、当事者にとって身近な相談相手となりやすく、またかれらによる性自認の受容が当事者の自己認識形成に影響する点で（莊島 2009）、重要な他者として位置づけられる。だが性的マジョリティの理解において、男女のいずれかに性別移行するトランスジェンダーが想定されがちであり（Garrison 2018）、親しい人に対してであっても男女に当てはまらない性自認を伝えることには困難が伴うと指摘されている（Dale 2013; Sumerau 2019）。そこで本稿は、男女に当てはまらない性自認をもつ者が、親とパートナーに対してどのようにカミングアウトし、その帰結としての親とパートナーからの反応をどのように解釈しているのかを明らかにしたい。

本稿ではまずカミングアウトに関する先行研究を検討し（Ⅱ節）、インタビュー調査の概要と分析の方針を述べる（Ⅲ節）。次に分析結果として親とパートナーへのカミングアウトの過程についてそれぞれ論じ（Ⅳ節）、最後に本稿の内容と意義をまとめる（Ⅴ節）。

Ⅱ. 先行研究の検討

本節では、トランスジェンダーを対象とする調査研究を中心にカミングアウトについて論じた先行研究を整理し、本稿の問いのもつ意義を位置づけていく。

カミングアウトは、性的マイノリティによる運動の過程で、ミシェル・フーコー（Michel Foucault）の『性の歴史Ⅰ』（1976=1986）の議論をもとに知／権力による囲い込みとして解釈された一方で、権力関係の内部において公私の二分的な境界に揺らぎをもたらし異性愛社会に対して抵抗を表明する実践として捉えられてきた（風間 2002）。ただレクローゼット／カミングアウトの区分は、日常的な他者との相互行為において明確な形で現れるとは限らない。たとえば金田智之（2003）はゲイ男性によるカミングアウトの実践から、周囲にセクシュアリティが「バレバレ」である状態が周囲の環境への受容につながることもあるとし、すでに親密な関係性が築かれている場合、カミングアウトしない状態は必ずしもレクローゼットの中にいる状態と同じではないと述べる。これらをふまえて、親子関係における同性愛をめぐる理解の仕方（三部 2014）など、他者との関係性のなか

テゴリーである（Dale 2013）。

で性的マイノリティがカミングアウトする過程が論じられてきた。

ではトランスジェンダーのカミングアウトは、他者との関係においてどのように論じられてきたのだろうか。周囲の人々からの偏見や暴力にさらされやすいトランスジェンダーは、環境に応じてそれらのリスクを予測し、カミングアウトするかどうかを慎重に決めている (Mizock and Mueser 2014)。またトランスジェンダーが「女／男らしさ」を追求する様子を描いた鶴田幸恵 (2009: 73-92) のエスノグラフィからは、男女いずれかの性別で生活しようとする者が、出生時に割り当てられた性別を外見から他者に知られないようにふるまおうとすることが示唆される。それでもトランスジェンダーの語りからは、職場で望む性別としての処遇を求めたり、家族やパートナーに対して理解を求めたりするために当事者がカミングアウトしてきたことがわかる (相馬・針間 2004; 土肥 2014)。

また他者からカミングアウトを受けられることは、自らの性のあり方を受容することにもつながる。たとえば中村美亜 (2005: 86-7) は、深刻な性別違和感の苦しみが薄れていったトランスジェンダーへのインタビューから、親しい人へのカミングアウトの受容が、ジェンダー・アイデンティティを再構築し、自己肯定感を高めて安心して生活していくうえで重要な要素だと指摘している。同様に、あるトランスジェンダーが「性同一性障害当事者である」と語

らなくなる過程を探った荘島幸子 (2008) は、当事者が友人や家族へのカミングアウトを経て、他者から「性同一性障害」である自分を受け容れられることで、性別適合手術による身体違和感の解消を目指すのではなく、他者との関係を維持して「性同一性障害」と共存しようとする旨を指摘する。

なかでも親へのカミングアウトは、子の健康や性別違和感に対処する仕方に深く関わるために重要性をもつ (Biblarz and Savci 2010; 杉浦 2013)。というも親による子の理解は、「性同一性障害」のカテゴリーの最終的な判断の拠り所にもなっており、理解を得る努力を継続できないことが子に性別違和感の再評価を促す道徳的要請があるとされている (杉浦 2013)。他方で、FtX³やMtXを含むトランスジェンダーの子をもつ親の語りを分析した石井由香理 (2018) は、近年において多様性言説を受容した親が、トランスジェンダーである子を理解しがたい存在ではなく価値ある存在として解釈し、二元的なジェンダー規範や性自認の一貫性を信じていない様子を描き出している。

このようにトランスジェンダーを理解しようとする親が描かれている一方で、先行研究からは、男女の二値に当てはまらない性自認をもつ者におけるカミングアウトの困難も見出せる。たとえば米国での調査研究において、男女に当てはまらない性自認をもつ者が、他者からの理解をはじめから期待しておらず、カミングアウトをしないことがあると指摘されている (Sumerau

3 本稿では調査協力者が用いていた表現にならない、出生時女性として割り当てられたが男女に当てはまらない性自認をもつ者を FtX (Female to X)、出生時男性として割り当てられたが男女に当てはまらない性自認をもつ者を MtX (Male to X) と表記する。

2019: Chap. 2)。また「Xジェンダー」を自認する者へのインタビューを実施した S. P. F. デール (S. P. F. Dale) によれば、異性愛を自明のものとする親に対して「Xジェンダー」であることそれ自体を説明することは避けられ、自分とパートナーの身体的性別が同じであるときに「同性愛者」であることだけを説明する傾向があるという (Dale 2013: 322-62)。同様に三部 (2019: 161-4) も、性自認に揺らぎがあるがそれを伝えることの難しさから「レズビアン」を名乗る者がいることを指摘している。そこでさらに、男女に当てはまらない性自認そのものを伝えようとする実践がいかなるものかを探ることは重要な課題だと言える。

加えて、パートナーへのカミングアウトについても、トランスジェンダーが性別移行する過程にパートナーが適応することが困難になったり、出生時の性別と性自認が一致するシスジェンダーとしてパートナーと出会っていたために出生時の性別を知られることへのストレスを感じたりすることが指摘されている (Califia 1997=2005: 357-8; Platt and Bolland 2017)。また中性を自認するトランスジェンダーがパートナーから理解を得られなかったことが、米国の調査研究においてカミングアウトの困難として指摘されている (Sumerau 2019: Chap. 2)。ただしこれらの研究においては、男女の二値に当てはまらない性自認自体をパートナーにどのように自己呈示するのか、その過程を詳しく論じているわけではなく、とくに日本においてそれらのカミングアウトがどのようになされているかは自明ではない。

このように先行研究からは、とくに親やパートナーへのカミングアウトが、リスクを伴いながらも関係性を別様のものにひらき、また自己を解釈するうえで重要性をもつことがわかる。ただし、男女に当てはまらない性自認がどのようにカミングアウトされているのかをさらに検討することが必要だと考えられる。このときカミングアウトの実践は、「バレバレ」として論じられたような他者からの外見に基づく判断や、性のカテゴリーにもとづく判断、それらを予期するトランスジェンダーの主体性をふまえたうえで描かれるべきだろう。そこで本稿では、男女の二値に当てはまらない性自認をもつトランスジェンダーが、どのように性のカテゴリーを用いながら親やパートナーという重要な他者に自らの性のあり方を呈示し、それに対する相手からの反応を解釈しているのかを検討していく。

Ⅲ. 調査の概要と分析の方針

本節では、インタビュー調査の概要と分析方針を説明する。本稿は、「Xジェンダー」を自認する4名のインタビュー・データを事例として取り上げて分析する。この4名は、筆者が「Xジェンダー」を自認する者の性自認のあり方と「Xジェンダー」が用いられた歴史的経緯を探るために2016年4月から2020年9月にかけてトランスジェンダー24名にインタビューを実施したなかで、男女に当てはまらない性自認をもち、カミングアウトの経験について親やパートナーとの関係から詳しく語っていた人たちである。男女に当てはまらない性自認をもつトランスジェンダーが重要な

表1 調査協力者プロフィール

仮名	出生時性別付与	性自認	年齢	親／パートナーの年齢
A	女性	男性寄りXジェンダー	20代	母親：50代 男性パートナー：20代
B	男性	両性、Xジェンダー	20代	母親：40代
C	女性	Xジェンダー	30代	母親：50代、父親：60代
D	女性	Xジェンダー	20代	母親：50代、父親：60代 女性パートナー：20代

他者にカミングアウトする過程を探ろうとする本稿において、かれらの語りは適切な事例だと考えられる⁴。

筆者はXジェンダー当事者団体で知り合った人たちにまずインタビューを実施し、スノーボール・サンプリングで協力者を募った。ただし今回事例として取り上げる4名のうち1名に関しては、例外的に性的マイノリティに関する講演会に参加した折に知り合ったことから協力を得た。調査協力者のプロフィールを、許可が得られた範囲で以下に記した(表1)。調査年については個々の語りを引用するときに補足する。調査協力者はいずれも何らかのグループに所属した経験があったが、かれらの親やパートナーが性的マイノリティのサポートグループなどに所属したことがある者はいなかった。

筆者は1～2回、直接会って1～3時間ほどかけてインタビューをおこない、必要な場合はインタビュー後にインタビュー内容について補足的にメール上で質問し、回答を得た。調査協力者には、まず論文作成の目的と筆者の身分を説明し、いつでも止められることを説明したうえで録音の協力を得た。また筆者は、アルファベットの仮名を振って匿名すること、事前に引用や要約に用いる箇所を送付して承諾を得たうえで論文にデータを用いること、データの保存の仕方などの倫理的配慮について調査協力者に説明し、同意を得たうえでインタビューをおこなった⁵。

調査協力者に対する質問内容は多岐にわたるが、性自認のあり方や、いつ・どのように・誰に対してカミングアウトをおこない、どのような反応が得られたのかをとく

- 4 カミングアウトしない／できないトランスジェンダーの語りは、別途詳細に検討される必要があるだろう。たとえば調査協力者のうち、時折自宅以外の場所で異性装すればよいと考える者や、親との関係がそもそも悪い者などはカミングアウトをしない／できないと語っていた。とくに現在40～50代の調査協力者には、親とほとんど絶縁状態にある状況や、外出を控えるよう言われた経験を語る者もいた。
- 5 本調査は組織的倫理審査を事前に経たものではないが、2019年11月に東京大学文学部社会学研究室社会調査倫理委員会から、これまでに収集したデータを調査協力者への確認のもとで用いることを記した調査研究の承認を得て、調査協力者の希望に応じて書面もしくはメール上で再度やり取りし、データを引用することについて許諾を得た。

に詳しく聞き取った。本研究で分析の対象としたのは、インタビュー・データおよび事後的におこなったメール上でのやり取りを文字化したものと、インタビュー調査後に作成したフィールドノートである。とくに着目するのは、知人や友人に対するカミングアウトよりも詳細に語られ、調査対象者にとって重要な意味をもつことが読み取れた親とパートナーに対するカミングアウトの過程である。

このようなカミングアウトの過程を分析するうえで、本稿では少数の事例から「個人が語る物語を徹底して詳細に分析していく」（伊藤 2020: 19）方針を採るナラティヴ・アプローチを参照した。このとき、カミングアウトする相手やコンテキストによって個人が異なる性のカテゴリーを用いることに注目したい。たとえば性的指向のカテゴリーが名乗られる仕方を分析した P. C. R. ラスト (P. C. R. Rust) は、当事者がステレオタイプと結びつくことを予期して「バイセクシュアル」を名乗ることを避けたり、「クィア」を政治的コミュニティでは名乗るが母親の前では用いなかったりすることを指摘している (Rust 2009)。これらをふまえて本稿では、個々のカミングアウトの場面において、調査協力者がどのように性のカテゴリーを用いた自己呈示をおこない、それが相手にどのように受け止められたと解釈しているのかを詳しく読み取った。

IV. 分析結果

本節では、分析の結果を説明していく。まず親に対するカミングアウト、次にパートナーに対するカミングアウトに焦点を当

てる。はじめに、男女に当てはまらない性自認であってもそれを親に伝えようとする試みはなされていたが、親子ともに、よく知られた社会的カテゴリーを手がかりとして性のあり方を呈示し、また理解しようとしていたことを論じる (1項)。だが男女に当てはまらない性自認それ自体の意味や、男女いずれかに扱わないでほしいという頼みを親が理解し、配慮することには困難も伴うことが示される (2項)。最後にパートナー関係において、関係性の摩擦を避けるために、性役割や性表現のあり方を予期させるものとして性自認の開示が必要とされやすいことが論じられる (3項)。

1. 性自認と異なる性のカテゴリーを用いた自己呈示——親へのカミングアウト①

本項では A さんと B さんの事例を通じて、カミングアウトにおいて親がよく知られている社会的カテゴリーを用いて子を理解しようとし、子の側も親の反応を予期した説明によって自らの性のあり方を伝えようとしていることを論じる。デール (Dale) による調査では、「Xジェンダー」であることを伝えようとせずに、有名人の名前を出したり同性愛者であることを伝えたりすることがあるとされていた (Dale 2013: 322-62)。本稿では協力者は「Xジェンダー」であることも親に説明しようとしていたが、まずは性自認とは異なる性のカテゴリーを用いて親に自己呈示する試みも見出された。たとえば MtX の B さんは、「究極の個人情報」である性自認のカミングアウトは「1回では済まない」うえに「リスク」を伴うものの、「隠さなくて済むのは、プラス」

であるとして、母親や妹、古くからの知り合いにはカミングアウトしている。特に母親へのカミングアウトについてBさんは以下のように語る。

B：当時「ハートをつなごう」⁶を見ていて、わたしこれっぽいんじゃねみたいな話。ただそれも一回じゃなくて10…5、6回はかかりましたね。最初は無反応でしたね。だんだんそういうの見るようになって知っていくみたいな。最初は、レズビアン。ゲイ・レズビアン特集。2回か3回かけて。で、LGBTをやりはじめて、ちょうど、それこそ遠藤まめたさんとか、石川大我さんとかがまだ、全然お兄ちゃんのころです⁷。筆者：そうすると、その時のカミングアウトは、Xジェンダーだとかそういうのではなくて、

B：なくて、まあセクシュアルマイノリティなんだ広い意味で。ぐらいだな、言葉はまあ知らなかったし。(中略)

筆者：パンセクシュアルであるってことも言ってるんですか。

B：一応ね。ただあんまり、言葉多すぎてわけわかんないんで。4つ⁸だって大変なのに。

筆者：じゃああんまりXジェンダーと

かそういう言葉は使ってないんですか。

B：ま、Xも言ってますけど。この前のNHK見た時に、Xの中にも4つあるって言ったら、「なんで4つもあんの!？」って言われて。

筆者：ははは(笑)、それ混乱しますよね、いきなり。

B：でも、別になんか自分で勉強しようと、してるみたい。(2016年)

母親へのカミングアウトは、LGBTを扱う番組などを通して15、16回ほど繰り返しなされ、最初は無反応だった母親が少しずつBさんのことを知ろうとする過程として語られる。Bさんは、「Xジェンダー」を知らなかったこともあって「広い意味で」「セクシュアルマイノリティ」であることを伝え、Bさんの母親は自ら本を読むなどして勉強し、時間をかけてBさんのことを徐々に理解していく。ここからは石井(2018)が論じたような、多様性言説の影響のもとで子を理解しようとする親の姿が読み取れる。

ただしBさんは、自分の性自認や女性的な服装を身に着けることについて母親に具体的に説明しているわけではない。筆者は「Xジェンダー」であることを積極的に伝

6 「ハートをつなごう」は、NHKで2006年から放送された福祉情報番組であり、「性同一性障害」「ゲイ／レズビアン」「LGBT」など性に関するシリーズを放送していた。

7 遠藤まめたはLGBTの子ども・若者支援に取り組んできたトランスジェンダーとして、石川大我はゲイであることをオープンにして選出された議員として著名な人物である。当時15～6歳だったBさんにとって、まだ活動を始めたばかりのかれらは「大人の」、「よく分からないお兄さん」に見えていたという。

8 ここでBさんは、「Xジェンダー」の下位カテゴリーとして用いられている「中性」「両性」「無性」「不定性」に言及している。

えているのではないかと想定して、その言葉を使っているのかどうか何度か尋ねている。だがBさんは、自分の性を「セクシュアルマイノリティ」という包括的な性のカテゴリーによってまず説明している。次に「Xジェンダー」であることも伝えているものの、「言葉多すぎてわけわかんない」としており、それぞれの性自認の概念を明確に理解することまでは親に求めていると考えられる。また筆者が4種類の下位カテゴリーがあることについて「混乱しますよね」と言ったことに対し、それでも母親が「勉強しようと、してる」とBさんが返す箇所からは、「Xジェンダー」を含む「セクシュアルマイノリティ」について理解しようとする母親の姿勢に納得している様子も読み取れる。

このようなBさんの語りからは、母親の受容的な様子が読み取れるが、2回目のインタビューでは、母親がカミングアウトを受けて葛藤を経験していたことも窺える。1回目のインタビューから2回目のインタビューの間に、Bさんは母親が実は葛藤していたことを後から打ち明けられて知ることになる。

B：母が、カミングアウトしたとき、泣いたくらい悩んだのね、やっぱり。どうしたらいいんだろうって。うち福祉で看護師やってたから、「ハートをつなごう」も家族で見てたの、だから理解は、見てはいたけど、まさか現実になるとは思わなかった。お願いだから、メスはいれなくてくれよって。手術して、術後の経過とか、プロだから、

それを見てると、例えばがん、前立腺にがんが見つかったとかで、摘出するのはわかるけど、それもないのにメスを入れるのはしないでほしい、自分の身体だから。であれば、応援はする、勉強もするからって。(2018年)

ここでBさんが「うち福祉で看護師やってた」と述べているのは、当時Bさんの母親が訪問看護の仕事をしていたことを意味する。Bさんの母親は、看護師という専門家としての立場から性的マイノリティへの一般的な理解はしていたが、典型的なトランスジェンダーの像として手術することをイメージし、がんのような病気がないにもかかわらず自分の子が手術をおこなうことに抵抗感を示している。ここからは、母親によるBさんへの理解がBさんとの大きな摩擦を経ずになされた背景には、Bさんが手術を望んでいなかったことがあると考えられる。

同様に子の側も、トランスジェンダーが手術による身体加工と結びつけられて理解されることをふまえて、「性転換」しない者として自己呈示することがある。以下は、FtXのAさんが母親にカミングアウトしたときの経験を振り返る語りである。

A：まあQ(国名)行ってたときに、初めてほんとに自由になれて、っていうのはまあ男扱いも女扱いもされないわけですよ、あんまり。個人として扱われるっていうのがけっこうあるんで。で、そしたらある種フラットになれて、なんか母親とスカイプしてい

るときにポロって、なんか出たんですよね。「前性転換手術したかったんだよ」って。で、でもやめたんだ、みたいな。この身体で、こういろんな困難を越えてきて、愛着があるから、まあ、この身体を、なんか捨てる気にはあんまりならないんだよね、みたいなことを言って。だから、でなんかQでなんか、自分のインフォメーションを入力するときに、こう、性別選ぶところがあって、クリックしたら「男」「女」「その他」が出てきたんですよ。「その他」じゃねってなって「その他」を押したっていうふうな、話をしたんですよ。で、だから自分は「others」、まあその、なんだろう、まあ向こうだから「others」って書いてあったんですよ。で「others」なんだみたいなことを言って、ちなみに母親は、「いつか男だって言われるかと思ってた」みたいなこと言われて、まあ、ですよ、ね、みたいな。男にしか見えないもんね、って話してて。(中略)

筆者：言った後はどんな感じだったんですか、なんか関係性とかは変わらなかったんですか。

A：変わらなかったです。まあ、ある種なんだろう、「その程度か」っていうか、男って言われるかと思ってたんですよ、だからXって言われて、「あれ、それでいいの？」みたいな感じになった感じ。(2016年)

Aさんは、Q国という異なる環境に置かれることで、性別カテゴリーではなく「個

人として扱われる」と感じ、母親にカミングアウトできるようになったという。Aさんはまず、「性転換手術したかった」として強い性別違和があったことを伝え、それでも完全に身体まで男性になりたいわけではなく、Q国でいう「others」であると説明している。このように社会的に知られている表現や、制度的に「others」が認められている国を挙げることは、自らの性のあり方の説明に説得力を付与することに寄与していると考えられる。

対して母親は、「いつか男だって言われるかと思って」おり、「それでいいの?」という反応だったとAさんは振り返る。というのもAさんは、小さい頃から女性的とされる服装への嫌悪感を示しており、母親にとって男性的であることは「バレバレ」(金田 2003)であったと言える。だが「others」と言われたことで、母親にとって「男」までは至らない深刻さの度合いの低い状態として、Aさんの性自認が理解されやすくなっていると考えられる。

筆者：もうXジェンダーっていうことで受け入れてくれている。

A：そう、そう。でも、「注射打ちてえ」とかって言ったりするから、まあ、“そっち”寄りだってことはわかってるし、でまあ、それ言ったときに、あの一、「Aらしさがなくなっちゃうんじゃない」っていう風に。ある種ちぐはぐというか、普段あまりありえないようなマッチングの人間がいるわけじゃないですか。「それ失っちゃうのはけっこうもったいないんじゃない

い？」みたいなことを言ってくれたのもまあ、母親で。(2016年)

実際、このようにAさんがホルモン注射を打ちたいと母親に表明すると、ホルモン注射は出生時割り当てられた「女性」としては「ありえないような」「ちぐはぐ」な性表現や性役割をおこなっている「Aらしさ」を失うことであると、Aさんを身近で見してきた者として母親が判断し、助言している。このような“自分らしさ”の尊重は、Aさんの男女の規範に沿わない性表現を肯定するものである一方で、親が子の身体のあり方を管理しようとする実践でもあるだろう。

このように、とくに医療を用いた身体加工をおこなわないトランスジェンダーにおいて、親に対して自らの性自認を呈示するよりも、「性的マイノリティ」として、あるいは「性転換」しない者として自己呈示しようとするのがあり、これに対して親は身体加工への警戒を示しつつ、子を理解しようとする様子が読み取れた。

2. 男女に当てはまらない性自認の理解をめぐる摩擦——親へのカミングアウト②

しかし以下のCさんとAさんの事例からは、自明視される男女の理解に当てはまらない概念やその内実としての男女に当てはまらない社会的処遇の必要性に向き合い、対処することが親に求められるとき、親子間での摩擦が生じることもあることがわかる。

FtXのCさんは、XジェンダーについてスピーチしたコンテストのURLを送ることで両親にカミングアウトしたが、それ以来、

両親とは疎遠になってしまったという。

C: 伝えて、父と母で「Xジェンダーって何だ」みたいな話になっただけですけど(笑)。で、母親は、「Xって何?」とか。わりと、母親には、話してる。やっぱり、なかなか理解はされない。「バイセクシュアルってこと?」って言われて、で、今思えば、あ、バイセクシュアルだなんて思うんですけど(笑)。そのときは、性的指向の話は全く別問題だからみたいな感じで、ほんとに、頭で勉強した知識を、あの、伝えてたみたいな感じで。Xってことは、確定してるけど、性的指向には向き合ってたところがあった。で、母が言ったことは当たりだったんですけど、いや、そうじゃないみたいな感じで。で、「性別は、2つじゃないし」みたいな感じで話したら、なんか、「精神科に行け」って言われた(笑)。(2016年)

ここでまだまだ多くの人が知っている概念とは言えない「Xジェンダー」のことをCさんの親は知らず、「バイセクシュアル」と混同している。「バイセクシュアル」ではないかという母親による指摘は事実としては正しかったが、Cさんが伝えたかった「Xジェンダー」であるということは理解されていない。また、「性別は、2つじゃない」というCさんの説明は親からの理解を得られず、Cさんは「精神科に行け」と言われてしまう。

この語りからは、「性同一性障害」のよう

な制度と結びついているカテゴリーや近年取り上げられている LGBT の各々のカテゴリーとは異なり、男女に当てはまらないことの定義が個々人にひらかれているような (Dale 2013)、「Xジェンダー」というカテゴリーを言葉で説明し、理解してもらおうとすること自体の困難も読み取れる。性別が2つではないという主張は、性別が男女の二値であることが自明視されるなかで理解されにくく、Cさん自身にとっても「頭で勉強した知識」から「性的指向」「性自認」の区分や、男女の2つでない性別区分について、概念上の説明をすることになりやすいと考えられる。親はCさんに「Xジェンダー」のことを尋ねるなどCさんの性自認のことを知ろうとしているが、カミングアウトしたCさんの意図とは異なり、男女の二値性を越える性自認を個人の病理に属する事柄として理解していると言える。

他方で、男女に当てはまらないことの内実は、それが具体的な処遇の要求と結びつく場合には理解されやすくなることもあるが、同時に子への配慮をめぐる困難も生じうる。Aさんは母親にカミングアウトしたとき、前項でみたように「その他」であることを伝えるのみならず、ジェンダー化されていない言葉で自分を呼ぶように母親に求めている。

A：(カミングアウトしたときに) 母親に、「自分のこと娘って代名詞で呼ぶな」って言ったんですよ。それけっこうヒートアップしてて、それ以外、「だから子どもって呼べばいいじゃん」って言ったんですよ、かたくなに。そ

したら、母親が自分の話をその、まあお母さん同士というか、大人同士で自分の娘、息子の話をすると思うんですけど。そのときに、自分の話をできなくなっちゃったんですよ。自分の子どもだって言うことがすごく不自然で、「え何、お子さん息子さん？娘さん？」って言われたときに、もう終わりで目の前が真っ暗になるというか、そうなるのが怖いしほんとに話せなくなっちゃったんですよ。(中略)「娘って呼ぶな」って言われて一週間たって。母親が「もう無理」って言って、「娘って呼ぶな」っていうのはもう明らかにもう無理だ」って言って。その時、なんか気付いたというか、マジョリティにはマジョリティのなんか、なんだろうなあ、強制しちゃいけないんだなあって思って、その、中性的な言葉が、ちゃんとしたいい言葉がない今、「娘って言うな」って言ったら、ほんとに、そういう精神状態になっちゃって、泣かれちゃって。ああ、自分は間違ったことしたんだなってすごく反省して。(2016年)

Aさんは母親にカミングアウトした際に、Aさんを「娘」ではなく、ジェンダー化されていない「子ども」という言葉で呼ぶように母親に要求する。母親はAさんを「娘」と呼ぶことをやめようとするが、Aさんの主張を一貫して尊重するためには、Aさんとの関係だけでなく周囲の人との相互行為においても「娘」という言葉を使わない必要があると気づき、それに対し

て限界を覚えている。

ここからは、少なくとも周囲の母親同士の会話において、自分の子を指して「子ども」という性別に言及しないカテゴリーが用いられることが不自然とされ、ジェンダー化された「息子」「娘」が用いられることが自然であると、母親によって理解されていることがわかる。Aさんは人びとが自然なものとして用いるような「中性的な言葉」がないなかで、自分の要求が「マジョリティ」としての母親に困難を抱かせたことを「反省」し、自己否定に陥ってしまう。

このように、男女に当てはまらない性自認への理解を求める主張は病理として扱われることがあるほか、親による子の性自認への配慮が「マジョリティ」である人々との間に摩擦を呼び込む場合、親子の私的な関係でのみ子の性自認を尊重することになりやすいと言える。

3. 性自認の相互理解——パートナーへのカミングアウト

パートナー関係でのカミングアウトにおいても、親との関係性と同様に男女に当てはまらない性自認を理解するときに困難が生じうる。とくにパートナー関係では恋愛・性愛の指向性に基づいて親密な関係を築くことが多いために、性別移行が性的指向における理解の齟齬を生み、パートナー関係を変質させることが指摘されてきた(Norwood 2012; Platt and Bolland 2017)。本項で見ていくAさんとDさんの事例からは、すでにパートナー関係にある者が出生時割り当てられた性別とは異なる性別に移行していく過程とは異なる事態が見出された。

まず、男性に友愛・性愛感情を抱く FtX のAさんの事例を検討する。Aさんにはシスジェンダー男性のパートナーがおり、Aさんは彼に「男性社会で生活」していることのみ伝えていた。「男寄り」の性自認をもつAさんにとって、これは自らの男性性を婉曲的に伝えようとする試みでもあった。だがパートナーは「じゃあ俺が、女の子と手つないでもいいの？キスまでしていいの？」として、男女の二値を前提とする異性愛感情に基づき、Aさんが異性愛者として他の男性を気にかけていると解釈する。そこでAさんは、自分の「生きる場所」である男性社会での生活が脅かされたように感じたとして、以下のように語る。

A：別れる時がちょっとおかしくなっちゃって、もう、疲れてたんですよ。なんか「化粧しろ」とか、「なんかしてくれ」とかって言われたり。それが非常にきつくて。なんなんだ、普通わかれよみたいな感じに思っちゃったんですけど、それを求めるタイプで。で、いや、まあノーチャンというか、いや意味わかんないでしょ、みたいな感じでつっぱねたっていうのがあって、それもすごく根に持たれてたりとかして。で、結局なんだ、その求めることと自分がやってあげられる範囲がマッチしなかったというか、全然満足させてあげられなかったんですよ。で、別れ際にそういうことを色々言われて、かなり女を押し付けられちゃったんですよ。もう無理ってなっちゃってもう、涙がばーって出てきて、その

時にカミングアウトっぽいことを言ったんですよね。「女ができることは自分ではできない」って言ったんですよね。相手からしたら謎なんですよ。全然わかんないんですよきつと。で、一応頑張って男性性も隠すようにはして、ただ女性性出せるわけでもないから、まあ、フラットな人間というかな、感じをやってたんですけど……。 (2016年)

Aさんは「男性寄りXジェンダー」という性自認を明確にカミングアウトせずに、「男性性」を隠しながらも「女性性」を出さないことで「フラット」な「人間」というあり方を呈示しようとしている。このあり方についてAさんは、「普通わかれよ」として、パートナーに対しては何も伝えなくてもある程度通じるというような「バレバレ」(金田 2003)である状態を期待していると言える。それでもパートナーが「化粧」などをAさんに求めることから、Aさんが呈示しようとした「フラット」な「人間」は、Aさんの意図から離れ、パートナーにとっては「女性」に付随する役割を十分におこなうことができていない状態として解釈されていることが読み取れる。

これに対してAさんは、「女ができることは自分ではできない」という「カミングアウトっぽいこと」をするが、「相手からしたら謎」として、性自認が「女」ではないということは伝わらないだろうと考えている。というのもAさんは、パートナーに対して「頑張って」「男性性」を隠すことを試みてもおり、性自認を明確に呈示してい

るわけではない。これはパートナーの性指向に配慮して、続いてきた関係を維持しようとする志向性によるものでもあると思われるが、その配慮は非対称にしかなされていない。パートナーを「満足させてあげられなかった」とするところからは、異性愛規範のもとで、化粧などの性表現の「女性性」を求めるパートナーの性指向が、Aさんが望む「男性性」の表現よりも優先して尊重されるべきものとして位置づけられていることがわかる。結果的には、自らの性のあり方と異なる自己呈示を他者に対しておこなうことは、関係性に摩擦を生じさせている。

他方でこのような困難を避けるために、出会いの場であらかじめ性自認が呈示されることもある。以下に引用しているのは、どちらかと言えば女性を好きになるというFtXのDさんの語りである。Dさんは、「本当の自分を認めて欲しいとかそういうんじゃないくて、親に孫の期待をさせ続けているのが悪いことをしている気になる」ために親へのカミングアウトを検討しており、またとくに女性の友人やパートナーには気軽に性自認のことを話している。

筆者：パートナーにはXジェンダーとかいう話もしてる。

D：してる、まあ最初はFtXだよみたいな感じで出会って。パートナーとの出会いは難しいよね、性自認オープンにしていかないとパートナー出会えないよね。みんなどうしているんだろう。(2018年)

Dさんは「本当の自分」というような自己の正確な理解を他者に求めるつもりはないが、そうしなければパートナーに出会えないとして、Twitterのプロフィールに「FtX」と記載してオフ会に参加するなど、とくにSNS上で事前に性自認を開示するようにしている。Dさんはメール上で補足として、性自認を開示しない場合、①自分の性とは異なる性に性的指向が向く人にアプローチしても友人以上のパートナー関係にまで発展させることが難しいという問題、②自分の性自認と相手が自分に求める性がずれていると結局のところ苦勞するという問題が生じうると指摘する。そこで「性自認をオープンにしておくことこの辺の問題を回避でき」、また「出会い目的の人が勝手に寄ってきてくれるので、パートナー探しにはちょうどいい環境になる」とDさんは言う。ここからは、「Xジェンダー」がその意味内容の不明瞭さにもかかわらず、あらかじめ男女の二値を自明視する者をパートナーから除外し、性役割や性表現において特定のあり方を予期させる言説的資源として必要とされていることが読み取れる。

このように、出生時に割り当てられた性別、性自認、性役割はそれぞれ別の水準に属しているものの、パートナー関係において男女の二値的なジェンダーに規範的な性役割行動をとる異性愛者という組み合わせが自明視されやすく、「Xジェンダー」であることを伝えることが困難になっていた。他方で、出会いの場において「Xジェンダー」であることの表明は、この組み合わせを自明視しない者を選ぶうえでの利点をもっていると言える。

V. 考察

本稿では、4名の「Xジェンダー」を自認する者の事例から、男女に当てはまらない性自認をもつトランスジェンダーが、親とパートナーに対して性のカテゴリーを用いながらどのように自己呈示し、それに対する反応を解釈しているのかを探った。以下では先行研究との関係で本稿の内容をまとめつつ、どのような意義が見出されたのかを説明する。

近年では多様性を唱える言説のもと、親がトランスジェンダーに関する情報を集めて子を理解しようとし、二元的なジェンダー規範を自明視しなくなる過程が論じられている（石井 2018）。本稿では親が情報を集めて子を理解しようとすることもあったが、子の性に対する親の理解が、具体的な性自認のあり方というよりも、GIDなどの社会的カテゴリーを参照し、性的マイノリティであることや身体加工することとの関係においてなされていたことが示された。とくに親は手術による身体加工を否定的にとらえ、身体加工がおこなわれないように働きかけることもあった。また、男女に当てはまらないという性自認それ自体は理解されにくく（Dale 2013; Sumerau 2019）、「Xジェンダー」であることは病理的な事柄として理解されることがあったほか、「娘」を「子ども」と言及するような性自認への配慮は、親子間のやり取りという私的な場面でのみ達成されており、母親とその友人間で一貫して子の性自認に配慮することには困難が生じていた。

また、パートナーへのカミングアウトにおいて、男女いずれかへの性別移行が関

係性にもたらず摩擦 (Califa 1997=2005; Norwood 2012; Platt and Bolland 2017) とは異なる困難が見出された。すなわち、男女の二値に当てはまらない性自認は外見からは理解されにくく、パートナーの二値的なジェンダーに基づく異性愛指向を尊重しようとするのが自分の性自認を呈示することを躊躇わせていた。だがこのような困難を予期して、SNSを通じた出会いの場であらかじめ「Xジェンダー」であることを開示することで、男女の二値や異性愛を自明視しないことを相互に期待する実践もなされることが示された。

これらの結果は、以下の点で意義をもちうる。第一に、デール (2013) の調査においてもまだほとんど見られなかった事態として、Xジェンダー当事者が「Xジェンダー」であることを親とパートナーに伝えようとする過程を描き出した点である。当事者は親が身体加工に関して抱く懸念やパートナーの性的指向を意識して「男」「女」「GID」などのよく知られた社会的カテゴリーに言及しながら、かれらに「Xジェンダー」であることを伝えていた。また当事者は親との関係と比べて流動的なパートナーとの関係において、あらかじめ「Xジェンダー」であることを開示し、後から性自認を説明せずすむ新たな関係を築こうとしていることも示唆された。

付記

本稿にご協力いただいた方々に感謝致します。なお、本稿は科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の成果の一部です。

第二に、このような重要な他者へのカミングアウトの過程を描くことを通じて、「Xジェンダー」という男女の二値に当てはまらない性自認を他者に呈示するときに生じる困難を明らかにした点である。男女の二値に当てはまらない性自認は、一方では身体加工をおこなわない“軽度”な性別違和として他者から受容されうるが、他方で男女に当てはまらない性自認自体の理解を求めることや社会的に表現することには困難が生じていた。とくに男女に当てはまらない性自認の社会的表現をめぐる困難は、他者からのカミングアウトの受容が性別違和感の軽減などのケアに結びつくという相互作用(中村 2005; 荘島 2008)のみによっては解消されにくい側面をもつと考えられる。というのも重要な他者へのカミングアウトが肯定的に受容されても、二値的なジェンダーと結びつかない代名詞などの語彙が社会的に受容されていないという問題が残る限り、他者からの理解は私的な関係に限定されたものになりやすいだろう。

本稿の知見は、少数の事例に基づく点で限界をもつうえ、出生時割り当てられた性別の違いがカミングアウトの過程にもたらず影響や、カミングアウトされる側が相互理解をめぐる摩擦に対処する仕方をさらに探る必要があると思われる。これらは今後の課題としたい。

参考文献

- Biblarz, J. T. and Savci, E., 2010, "Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Families," *Journal of Marriage and Family*, 72: pp. 480-97.
- Butler, J., 1997, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York, London, Routledge. (竹村和子訳, 2004, 『触発する言葉——言語・権力・行為体』 岩波書店).
- Califia, P., 1997, *Sex Changes: Transgender Politics*, San Francisco, Cleis Press. (石倉由・吉池祥子ほか訳, 2005, 『セックス・チェンジズ——トランスジェンダーの政治学』 作品社).
- Dale, S. P. F., 2013, "Mapping 'X': The Micropolitics of Gender and Identity in a Japanese Context," PhD thesis, Sophia University Department of Global Studies.
- 土肥いつき, 2014, 『「ありのままのわたしを生きる」のために (性教育ハンドブック vol.6)』 日本性教育協会.
- Foucault, M., 1976, *Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*, Paris, Gallimard. (渡辺守章訳, 1986, 『性の歴史I 知への意志』 新潮社).
- Garrison, S., 2018, "On the Limits of "Trans Enough": Authenticating Trans Identity Narratives," *Gender & Society*, 32 (5): 613-37.
- 石井由香理, 2012, 「カテゴリーとのずれを含む自己像——性別に違和感を覚える人々の語りを事例として」『社会学評論』(日本社会学会) 63巻第1号: pp. 106-23.
- . 2018, "Rebuilding Relationships in a Transgender Family: The Stories of Parents of Japanese Transgender Children," *Journal of GLBT Family Studies*, 14(3): pp. 213-37.
- 伊藤智樹, 2020, 「支援の社会的文脈とナラティヴ・アプローチ」水津嘉克ほか編『支援と物語の社会学』生活書院.
- 金田智之, 2003, 「「カミングアウト」の選択性をめぐる問題について」『社会学論考』(首都大学東京・都立大学社会学研究会) 第24号: pp. 61-81.
- 風間孝, 2002, 「カミングアウトのポリティクス」『社会学評論』(日本社会学会) 53巻第3号: pp. 348-64.
- Mizock, L., and Mueser, K. T., 2014, "Employment, Mental Health, Internalized Stigma, and Coping with Transphobia among Transgender Individuals," *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, 1(2): pp. 146-58.
- 中村美亜, 2005, 『心に性別はあるのか? ——性同一性障害のよりよい理解とケアのために』 医療文化社.
- Norwood, K., 2012, "Transitioning Meanings? Family Members' Communicative Struggles Surrounding Transgender Identity," *Journal of Family Communication*, 12: pp. 75-92.
- Platt, L. F. and Bolland, K. S., 2017, "Trans* Partner Relationships: A Qualitative Exploration," *Journal of GLBT Family Studies*, 13(2): pp. 163-85.
- Rust, P. C. R., 2009, "Bisexuality in a House of Mirrors," In P. L. Hammack and B. J. Cohler eds., *The Story of Sexual Identity: Narrative Perspectives on the Gay and Lesbian Life Course*, New York, Oxford University Press.
- 三部倫子, 2014, 『カムアウトする親子——同性愛と家族の社会学』 御茶の水書房.
- . 2019, 「カミングアウトしやすいのは「誰」なのか——「LGB」へのインタビューをジェンダーから読み解く」綾部六郎・池田弘乃編『クィアと法——性規範の解放／開放のために』日本評論社.
- 荘島幸子, 2008, 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程 ——自

- らを「性同一性障害者」と語らなくなったAの事例の質的検討」『パーソナリティ研究』（日本パーソナリティ心理学会）16巻第3号：pp. 265-78.
- 相馬佐江子・針間克己, 2004, 『性同一性障害30人のカミングアウト』 双葉社.
- Stryker, S., 2017, *Transgender History: The Roots of Today's Revolution*, New York, Seal Press.
- 杉浦郁子, 2013, 「「性同一性障害」概念は親子関係にどんな経験をもたらすか——性別違和感をめぐる経験の多様化と概念の変容に注目して」『家族社会学研究』（日本家族社会学会）25巻第2号：pp. 148-60.
- Sumerau, J. E. and Lain A. B., 2019, *America through Transgender Eyes*, Lanham, Boulder, New York, and London, Rowman & Littlefield Publishers.
- 鶴田幸恵, 2009, 『性同一性障害のエスノグラフィ——性現象の社会学』 ハーベスト社.

(掲載決定日：2021年5月14日)

Abstract

Self-Representation as “Being *X-jendā*”: Narratives Focusing on Coming Out to Parents and Partners

Kyoko TAKEUCHI

This paper uses the narratives of four self-identified *X-jendā* individuals as case studies to examine the individual processes adopted by those who do not identify as gender binary to come out to parents and partners. The analysis results reveal that individuals who identify as *X-jendā* are viewed in parent-child relationships as experiencing a “mild” state of gender dysphoria because they do not need to undergo gender reassignment surgery. However, the socially strong binary view of gender renders it difficult for people to understand and consider non-binary gender identities. The results also evinced that prioritizing personal sexual orientations and not communicating one’s gender identity causes friction in romantic relationships. Therefore, gender non-conformists attempt from the outset to disclose their *X-jendā* identity. These results illuminate the practices of those who self-identify as *X-jendā*: they use different gender categories depending on situations to change the gender-related significations assigned to them by others. This study outcomes indicate the need for the social visibility of gender identity expressions beyond the gender binary.

Keywords

transgender, *X-jendā*, coming out, gender identity, category